同志社大学

2017 年度　卒業論文

論題：同棲するカップルの結婚意欲について

社会学部社会学科
学籍番号　19131074
氏名　山近晴奈
指導教員　立木茂雄教授
（本文の総字数　22103 字）

同棲するカップルの結婚意欲

[キーワード]　結婚　同棲　カップル

19131074 社会学部社会学科　山近晴奈

本稿は同棲するカップルに焦点を当て、結婚意欲という観点から調査を行ったものである。アメリカでは若者の同棲が日本よりも一般的に行われており、同棲に対する認知も高い。しかし、同棲を経験した男女は結婚意欲が低下するというデータが存在するという。本来同棲は様々な理由はあるが、2 人が一緒に住む疑似結婚のように捉えられ、結婚意欲が低下する事を前提にして同棲するカップルは存在しないように思えた。つまり結婚意欲が高い、もしくは平均的である男女が同棲を行った結果、何らかの原因によって結婚意欲が低下してしまうということである。そこで実際に同棲を行っている 20 歳代の女性 7 人にインタビューを行い、同棲の内部には何が起こっているのかを調査した。この調査から、「性別役割分業意識」と「コミュニケーション頻度」が男女の関係性に何らかの影響を与えていることが分かった。性別役割分業とは主に家事の事を指し、家事やコミュニケーション頻度について、お互いがどう捉えているか、相手の考えかたをお互いに理解して行動できるかによって、同棲が上手くいくカップルとそうでないカップルに別れてしまうのである。

1　序論

筆者は自宅から大学に通っている。しかし他県から同志社大学を受験した学生は、親元を離れ一人で下宿をしている学生も多い。大学生活に慣れていくにしたがって、下宿をしている友達も増え、一緒に遊んだり話をしたりするようになった。授業やサークル活動などを通して大学生同士のカップルも増え、恋愛についての話題で盛り上がるときに、どちらか一方または両方が下宿をしているカップルの付き合い方が高校生のときのそれとは変わっていることに気が付いた。授業やアルバイトが終わると、どちらかの家で大半の時間を過ごす同棲（半同棲）という形態である。筆者は昔から結婚願望が強く、小さいころは大学を出たらすぐ結婚したいなどと考えていたのだが、付き合っている彼氏と同棲（半同棲）をすることは考えていなかった上に、したいと考えたこともなかった。学生のうちから一緒に住んでしまうと、結婚したときに変化を見いだせないのではないかと漠然と考えていたからである。しかし、周りの友達や高校の同級生は大学生になって一人暮らしをしだした途端、交際相手と一緒に住み始めるケースが目立ってきた。また、同棲（半同棲）をしているカップルの中には、うまくいくカップルとうまくいかずに別れてしまうカップルの両方が存在することに気が付いた。交際していて別れるカップルと長く続くカップルの両方が存在するのはもちろんなのだが、仲の良かったカップルが同棲（半同棲）を開始した途端に関係性が変化するケースが多くみられた。

就職活動を通して他大学の学生と関わることも多かったのだが、同志社大学だけでなく他大学でも同様に、同棲（半同棲）するカップルは一定数存在し、それも広く一般的であるという。しかし、私の記憶では、母や祖母の代では今より性について厳しく、同棲は一般的でなかったように感じる。

そこで、同棲(半同棲)はカップルの関係性を変化させてしまうのか、同棲（半同棲）するカップルはどのような趣向をもち、どのような考え方をしているのか、2 人の間には何が起こっているのかを調査したいと考える。

はじめに、現在の日本の社会的背景について論じる。近年、日本で少子高齢化が深刻化している。他の先進国と比較しても、日本の進行スピードは群を抜いている。これに対して、政府はさまざまな対策を強化してきている。1994 年にエンゼルプラン、1999 年に少子化対策推進基本方針を策定し、2003 年に少子化社会対策基本法を制定。2004 年には、少子化社会対策大綱を決定した。また、同じ年に企業に対して仕事と子育ての両立支援を義務付ける次世代育成支援対策推進法を制定。また、女性が働きやすいように、社内で子どもを預かることができるような施設も一般的になろうとしている。このように、少子化に対して国をあげてさまざまな取り組みがなされていると言える。しかし少子高齢化の根本的な原因の 1 つとして、若者の結婚率の低下という問題があるのは明白である。日本ではすでに結婚している男女を対象とする支援は存在するものの、その前段階の男女交際に対する策は存在していない。佐藤（2010）によると、2008 年頃から「婚活」という言葉が流行し始め、婚活と銘打った商品の出現や、異性に出会うことができるイベントの参加に抵抗感を感じる人が少なくなった。しかしそれよりも社会的に重要なことを「婚活」という言葉が浮き彫りにしたという。それは、これまでとは異なり、現代は誰でも自然に結婚できる社会ではなくなったということを若者が認識したということである。実際に大学生が頻

繁に通う場所に「相席屋」という飲食店が出現した。これは女性が飲食しても一切無料な一方で、男性が高いお金を払って見知らぬ男女が一緒に食事をするというシステムである。男性だけが高額な料金を支払うビジネスモデルであるにも関わらず男女の出会いの場として利用され、大人気なため店内に入ることすらできないことも多い。またSNSを利用した、出会い目的で登録するサイトなども徐々に一般化しつつある。このように、男女が出会いを求めて行動することに抵抗がなくなってきたという実感が現在の若者にはあると言える。

一方で、交際をしている男女にも徐々に変化がでてきている。日本の非婚・晩婚化の 1 つの原因として、同棲するカップルの増加があげられる。岩澤（2005）によると、2004 年の 18 歳から 49 歳までの女性を対象にした調査では、およそ半数が同棲に「抵抗がまったくない・またはあまりない」という結果がでており、とくに若い世代で同棲に抵抗がない人が増えているという。つまり筆者がもっとも身近な大学生のカップルにも、同棲に対しての認識の変化や、増加傾向にあると考察する。そのため同棲という一種のブームと言える現象に焦点を当てて考察する。

また、交際している男女が一緒に住むにあたって女性に重くのしかかるものの一つに家事があげられる。結婚していると男性が働いて女性が家事をするという考え方はまだまだ一般的であるが、交際している男女において立場は同等であると考える。近年、女性の社会進出が一般的になっており、男女共働きの家庭も増えてきている。そこで筆者は男女の家事分担における公平感に注目した。女性の社会進出が促進されることによって、男性が働き、女性が家事をするという一昔前の理想的な家庭環境からは変化しているといえる。そこで結婚という契約は結んでいないが男女が共に同じ家で長い時間を過ごす同棲では、その家における家事分担はどのようになっているのだろうか。現在同棲中のカップルにおいても、どちらか一方が日中を家で過ごし家事の全般を行うと言うケースはほとんどないと考えられる。学校やアルバイト、友達と過ごす時間がお互いに存在する中、家事分担はどのような形をとっているのだろうか。

2　先行研究

2.1　同棲に関する先行研究

(1)　同棲の定義

近年急激なスピードで一般的になった同棲であるが、同棲が社会に広がる前は結婚前の準備期間として位置づけられていた。しかし広がるにつれて次第に同棲が安定した家族形態として定着する結婚代替型が多くなるとされている。同棲とは、さまざまな定義が存在するが、C.L.コールは同棲を「結婚していない異性のだれかと一緒に生活すること」、「結婚していない異性のだれかと連続して 3 か月以上の間 1 週間に 4 夜以上、寝室および/あるいはベッドをともにすること」、「結婚を通して自分たちの生活を公式的に確かなものとすることなしに同じ世帯に結婚と同じ条件のもとで 2 人の異性の成人が生活をともにすること」と定義している。一見、同棲をする男女は互いに結婚意識が高く、同棲に対する抵抗感がない人たちの増加によって、結婚率は上昇していくように思える。しかしアメリカの研究では、興味深いデータがでている。「同棲の増加が晩婚化のみならず、再婚率の低下につながっている」（佐藤 2010:78）ことや、「同棲の増加が少子化を促進することも考えられる」（佐藤 2010:78）というものである。これは、日本のように婚外出生率が低い国では、同棲

の増加が出生率に直接影響するからである。(佐藤 2010)同棲は各年代で増加傾向にあるが、とりわけ大学生でもっとも多い同棲の形態は、居住地は 2 つあるが大半の時間をどちらかの家で共に過ごす「半同棲」という形が一般的である。このように同棲への抵抗感が少ない大学生を調査対象とし、現代の若者がなぜ結婚しない（したがらない）のかを調査する。

(2) 同棲普及原因

同棲しているカップルと、していないカップルを調査する前に、同棲の現状と実体を調査する。日本の同棲率は徐々に増加している。国立社会保障・人口問題研究所によると、1987 年の 18 歳から 34 歳の独身者を対象にした調査で、男性は 3.2%、女性は 2.8%であったが、2005 年の研究では男性 7.9%、女性 7.3%に上昇しているという。同棲が普及してきた原因としては、6 つあげられる。1 つ目は都市化である。これは匿名性拡大に伴うプライバシー領域の拡大である。2 つ目は、性的価値とその行動パターンにおける変化であり、若い女性の非処女率の増大があげられる。3 つ目は、デート行動のパターンにおける変化である。これは、性的交渉を生殖行為として位置付けてきた宗教的価値に対して、それを愛情表現として位置付ける性的価値の勝利である。4 つ目は、子どもとしての取り扱いへの抵抗の拡大である。肉体的成熟の早期化、意識としての成熟への早期開始化への欲求の拡大があげられる。5 つ目は、離婚率の拡大、結婚の意味の概念的変化があげられる。これは結婚の意味が、「経済的共同」よりも「人間的成長」や「余暇の探求」として位置づけられると、選択の自由度が大きくなるということである。6 つ目は、個人的成長を強調する時代精神の台頭である。これは若いうちから単純に結婚という形において永遠性への委託を決定することへの疑問が若者たちの間で具体化されたことである。

(3) 同棲の 4 類型

佐藤（2010）によると同棲には 4 つのタイプがあり、結婚代替型、結婚先駆け型、試行段階型、独身代替型の 4 つに分類されるという。結婚代替型とは、同棲関係は比較的長期間継続されるため安定的であり、子どもを持つカップルが多いのがこのタイプである。結婚代替型は結婚よりも同棲という形態を好んでいると言えるため、結婚に対する意欲は低いことが考えられる。結婚先駆け型とは、同棲を結婚に向けての同居と捉え、同棲相手と確定的な結婚の計画をもち、関係も安定しているタイプである。このタイプの人々は、結婚に移行する割合が最も高く、およそ半数が 5～7 年以内に結婚に移行している。試行段階型とは、結婚前のトライアル同棲とはいえ、結婚前に相手との相性を確かめる目的で同棲をしており、結婚に移行せずに解消される割合が高いタイプである。結婚意欲は低くないが、現在の相手と結婚する確定的な約束はもっていない。継続期間も比較的短く、結婚に移行せずに解消される割合が高くなっている。独身代替型は、同棲を独身者の交際の最終段階と位置づけ、独身でいることの代替としてみている。そのため同棲の継続期間が短く、結婚に移行する割合も低いタイプである。この数十年で婚前性交渉への寛容度が高まるなど、交際の形態が変わってきていることから、同棲は交際の一貫であるとの見方が強まっている。このように、同棲にもさまざまな種類があり、結婚を意識しているタイプと、結婚以外の目的で同棲しているタイプに分かれることがわかる。また、岩澤（2005）によると、25 歳から 49 歳の同棲を経験した女性のうち、同棲から初婚に移行した割合は、半数程

度であるという。このように、同棲している男女が必ずしも結婚に近いというわけではないということがわかる。また、同棲中の男性の結婚意欲は高いにも関わらず、過去に同棲経験したことがあり、現在は同棲していない男性は、過去に交際経験がない男性よりも結婚意欲が低いというデータがある。また、女性に関しても、過去に同棲を経験した人は結婚意欲が低くなっている。一方、男女どちらも交際しているが同棲はしていない人々の結婚意欲が、同棲中の男女と比較しても高くなっていた。(佐藤 2010) このように、同棲をせずに付き合っているカップルの結婚意欲は高いが、同棲を一度経験して結婚に移行せずに解消してしまった人の結婚意欲が低いことがわかる。

2.2　親密な関係性

交際している男女について調査するにあたって、アンソニー・ギデンズの理論枠組みをもとに、現在の男女交際について理解する。本稿では、「親密な関係性」「純粋な関係性」「ロマンティック・ラブ」「コンフルエント・ラブ」という 4 つのキーワードから男女交際について考察する。そもそも結婚とは、家庭を離れ、経済的自立をするために半ば強引にするものであり、恋愛と結婚は別物であった。そのためかつては見合い結婚が一般的であり、男女の関係性は婚姻にのみ結びついていた。国立社会保障・人口問題研究所の調査では、1982 年では 29.4%を占めていた見合い結婚が、2005 年では 6.4%に減少している。見合い結婚のメリットとして、当事者が選ぶ以前に、すでに候補者についての詳細な情報が提供され、自分に似合いの相手である可能性が高い（佐藤 2010）というものがある。しかしそうした結婚確率が高い見合い結婚は次第に影をひそめ、現在は恋愛結婚が増加してきている。この恋愛結婚の誕生のもとには、ロマンティック・ラブという概念があった。このロマンティック・ラブをもとにした、男女に限らない人との関係性として、「親密な関係性」があげられる。「親密な関係性」とは、大きく分けて 3 つの特徴があげられる。1 つ目は、相手に夢中になるのではなく、相手の特性を知り、それを自分自身の特性の中に活かしていくこと。2 つ目は、平等な対人関係のもとで、他の人々や自分自身とおこなう気持ちの通じ合いのこと。3 つ目は、その人が世間の目にさらすことのない感情や行いを相手に開示することである。この対等な関係性こそが、恋愛結婚をうみだした男女の自由な恋愛を理想とする、「ロマンティック・ラブ」という概念に大きく影響を受けているのである。ロマンティック・ラブとは、自らの意志や感情にもとづいて交際相手や配偶者を選ぶことを肯定し、自分が選んだ相手と恋愛を経て結婚する。一度結婚すれば、他の人とは恋愛しないという考え方である。さらに自己投影的同一（相手の中に自分の自我が存在すること）ができるか否かを重要視する。ロマンティック・ラブは、関係性が外部社会の基準よりも二人の感情的没頭に由来するという、平等主義的傾向だったが、これは、女性の性的な衝動や性的な実践を家庭にのみ拘束することになった。これを A・ギデンズは「家庭生活への容赦ない奴隷」と表現している。A・ギデンズ（1995）によると、近代が発達していく初期の段階では、多くの女性にとって愛情と結婚は不可避的に結びついていたが、婚姻についての考え方の変化は、男性よりも女性に強い影響を及ぼしたという。佐藤（2010）によると、同棲中の人と、過去に同棲を経験したことのある女性は「男女が一緒に暮らすなら結婚すべき」という考え方に賛成する度合いが低くなっている。つまり、同棲を通して女性は、同棲が必ずしも結婚に結びつかなくてよいと考えるようになるというデータがでている。

以前はロマンティック・ラブが理想とされていたが、女性の性的開放と自立を求める圧力のもとで、現在は崩壊傾向にある。そこで登場したのが「コンフルエント・ラブ」である。

2.3　純粋な関係性

コンフルエント・ラブを理解する上で、大きく分けて 3 つの特徴がある。1 つ目は、能動的な偶発的な愛情であり、ロマンティック・ラブに対する「永遠」で「唯一無二」な特性とは矛盾している。ステレオタイプ化された役割遂行より、相互のコミュニケーションを重視していること。2 つ目は、年収の多寡や世話を焼くかよりも、相手に対してどれだけ心を開けるか、無防備に自分をさらけ出せるかによって愛情を量るということ。3 つ目は、関係の永続性よりも流動性を特徴とすること。満足いかない場合、その関係性が壊れてしまうこともある。コンフルエント・ラブは、対等な条件のもとで感情のやり取りを想定しているため、こうした想定が強まれば強まるほど、男女の関係性は「純粋な関係性」の原型に近付いていく。この「純粋な関係性」とは、性的純潔さとは無関係で、関係がもたらす精神的充足や価値によってのみ構成・維持されている状態のことを指す。さらに、互いに相手との結びつきを続けたいと思う満足感を互いが認識している場合において関係を続けていく状況を指しているため、相互コミュニケーションや、意思の疎通がもっとも重要視される。またもっとも特徴的なのは、自発的に構築・維持・停止される関係性であるということである。この場合愛情は、互いに相手にたいしてどれだけ関心や要求をさらけ出し、無防備になれているか、覚悟できているかによって進展していく。つまり、「ロマンティック・ラブ」のような「親密な関係性」は見合い結婚から恋愛結婚に移行する際に人々が描いていた理想像であり、現代の特に若者の恋愛観や結婚観は、「コンフルエント・ラブ」のような「純粋な関係性」に近付いてきていると考える。恋愛結婚の増加によって、結婚以前の交際の段階はとても重要なものになった。なぜなら、結婚がある程度約束されている見合い結婚とは違い、交際の質によって結婚するか、関係性を解消するかに分かれるからである。恋愛結婚が増加しているということは、互いの経済的利益などではなく、「この人と一緒にいたい」という感情で結婚する人々が増加しているということである。これが純粋な関係性において重要視される「互いに結びつきたい」という感情と一致するのである。しかし純粋な関係性において男女は、交際をはじめること、安定的に付き合うことはもちろんのこと、関係性がどちらか一方の決断で終わる可能性があるという特徴がある。自己投入を生み出し、2 人の歴史をつくるためには、お互いが相手のために尽くしていく必要がある。以前の婚姻関係は関係の維持が当然視されるものであったため、相手に尽すことがすなわち関係性の良化につながっていた。しかし純粋な関係性において、男女は相手の思うままに関係を終わらせることができるため、無条件で自己投入をすると、関係が解消した場合に大きな精神的打撃を受けることになってしまう。このように、関係性を長続きさせるためには自己投入が必要であるという前提のため、将来訪れるかもしれないであろう打撃に耐えうる精神力が必要なのである。また、山田（2009）によると、コンフルエント・ラブは関係の解消が個人の感情に左右されるといった不確定要素があるため、付き合っていても漠然とした不安がぬぐいきれないという問題点がある。そのため、常に関係のメンテナンスを行うような振る舞いにつながることが多いという。例えば、1 日に何往復も意味の無いメールを送り合ったりしているのも、その振る舞いの 1 つである。最近では LINE

というアプリケーションが大流行している。これはメッセージツールの 1 つであるが、他のメッセージツールと大きく異なる点は、相手が自分の送ったメッセージを見たかを確認することができる「既読」という機能がついていることである。この機能によって、相手がメッセージを見ているのに返事が返ってこないことを不安に感じる機会が増える一方で、返事が返ってくると妙に安心するのである。コンフルエント・ラブが男女交際の概念として一般的になっているからこそ、漠然とした不安を少しでもぬぐいさりたいという無意識的な感情からこのようなメッセージツールが流行するのではないだろうか。また、交際相手や結婚相手を自分で自由に選択することができるようになったため、「本当にこれでよかったのか」という不安や迷いにおそわれる。社会経済的条件よりも、感情や意志などの不確定なものによって相手を選ぶことで、誰を選んでも幸せになりきれないという現象が生じる。自分の気持ちに確信を持つことが難しいため、結婚という大きな節目のときに選択できないことも多い。

さて、親密な関係性の特徴の 1 つに「平等な対人関係」というものがあるが、A・ギデンズ（1995）によると、多くの男性は親密な関係性という状況のもとで、他の人たちを対等な存在として愛していくことはできないが、権力の面で自分たちよりも下にいる人々（女性や子ども）や、あるいははっきりとは表示できない親しい結びつきを共有しあう人達（仕事仲間など）に対しては、愛情や気遣いを示していくことが可能であるという。一方多くの女性は、自分たちが関係性の中で対等な情緒的支援や、尊重なり敬意を受けていないことをしっている。それでも、男性がいかに人を傷つける態度をとっているかを男性に説明することは難しい。これらが積み重なることで、関係を切り刻み、愛情を飢えさせ、たんなる忍耐に変えていくことになるという。これは、平等な対人関係をもとにする親密な関係性とは矛盾している。このことから、親密な関係性は理想的であるが、現実的でないことがわかる。女性の方が男性よりも同棲を通して結婚意欲が低下するのは、このためであると考察する。一方、ギデンズ（1995）によると、「自分たちの結合条件の決定に、一人ひとりが参加できること」これが純粋な関係性の理想像を具体的に表しているという。今までの婚姻形態と、現在の婚姻形態の重要な違いをうまく言い表しており、親密な関係性の実現可能性の核心をついている。この結合条件とは、具体的に 2 人の関係の開始、継続、解消があげられる。相手を尊重するだけでなく、相手に対して心を開くこと、また自由で率直な意思の疎通は純粋な関係性を構築し継続する上での必須条件である。

2.4　家事負担

また、結婚していない男女が一緒に暮らす上で重要になってくるであろう家事負担について、岩間（1997）によると、性別役割分業がまだまだ一般的だと考えられている日本社会においても、実際に妻の家事負担が多い状況は不公平感を高めるという。しかしその一方で、妻が家事をすべきだという性別役割分業観を内面化することによって不公平感は緩和される。さらに夫が社会的経済的に成功していると不公平感は弱められるという。このようなメカニズムがあることから、女性はこれまでの日本社会の主流であった性別役割分業システムを前提として、家事分担に関する公平評価を下していると結論づけることができる。また末盛（1999）によると、夫の家事遂行よりも、情緒的サポートの方が妻の夫婦関係満足感に対する効果が大きいという。伝統的な性別役割意識を持つ妻の方が、革新的

な性別役割意識をもつ妻より、夫の情緒的サポートの状況如何によって、夫婦関係満足感が大きな影響を受けている。

3　調査方法

3.1　調査内容

本調査では、近年増加傾向にある大学生の同棲（半同棲）カップルに焦点をあて、同棲（半同棲）する大学生がどのような考えをもっているのか、どのような環境であるのか、20 歳代の女性 7 人に 30 分から 1 時間程度のインタビューを実施した。その分析データをもとに、同棲（半同棲）するカップルが必ずしも結婚に近いというわけではない原因を探る。

3.2　調査方法

調査方法は 2016 年 6 月 28 日から 2016 年 8 月 27 日の期間に、1 対 1 のインタビュー形式を採用し、カフェなどで 30 分から 1 時間程度インタビューさせていただいた。そのインタビュー内容を文章に書きおこした。

(1) インタビューの質問内容

インタビュー内容は対象者によってそれぞれ異なるが、インタビュー後、質問を分類分けし共通して確認できた項目は以下の通りである。

表：1　インタビューの質問内容

Q1	どのような経緯でつきあいましたか?
Q2	現時点でどれくらいの期間付き合っていますか?
Q3	付き合ってどれくらい経ってから同棲を始めましたか？
Q4	同棲をするまでは、どのような流れでしたか？
Q5	同棲を始めたときはどのような感情でしたか？
Q6	同棲しはじめて、行動面にどのような変化がありましたか？
Q7	どのような理由で喧嘩をしますか？
Q8	喧嘩をしたときにはどのように仲直りしますか？
Q9	今の相手とは将来どうなっていきたいですか？
Q10	同棲して自分の気持ちに変化はありましたか？
Q11	連絡をとる頻度はどれくらいですか？
Q12	家で二人きりのときにどのような話をしますか？
Q13	前付き合っていた方と、今付き合っている方の違いはありますか？

Q14	前付き合っていた方と別れた理由は何ですか？
Q15	次付き合う人がいたらまた同棲しますか？
Q16	どちらの家で同棲していますか？
Q17	誰かと遊びに行く場合は、彼氏にどこまで伝えますか？
Q18	記念日などは大切にしていますか？
Q19	同棲を継続しているうえでのルールはありますか？
Q20	実家との関係はどのような感じですか？
Q21	同棲相手に確認したいことは何ですか？
Q22	もし今付き合っている方と別れることがあったら、次はどのような人と付き合いたいですか？
Q23	友人に同棲の感想を尋ねられたらどう返しますか？
Q24	休日はどのように過ごしていますか？
Q25	家事の分担はしていますか？
Q26	同棲することでさらに相手について知ることができたことは何ですか？
Q27	同棲すると結婚意欲が低下するというデータが存在するのですが、そのデータに対してどう思いますか？
Q28	同棲をしていて、どのようなときに相手と一緒にいたくないと感じますか？

(2) インタビュー対象者

対象者は同棲を経験したことのある 20 代前半から 20 代後半の女性とした。インタビュー対象者のプロフィールは以下のようになっている。

表：2　インタビュー対象者のプロフィール

・1 人目　6 月 28 日インタビュー実施　46 分間

大学時代に同棲を経験したのち、就職で中距離恋愛を経て結婚。

女性（インタビュー対象者）

　年齢　27 歳

　出身地　大阪府出身

　居住地　兵庫県

　大学生時代　文系

　家族構成　父母姉

男性（インタビュー対象者の交際相手）

　年齢　28 歳

　出身地　京都府出身

　居住地　兵庫県

大学生時代　理系 家族構成　母弟（父は他界）
・2 人目　6 月 28 日インタビュー実施　29 分間 現在交際 6 か月で、同棲歴 3 か月程度。 女性（インタビュー対象者） 年齢　21 歳 出身地　広島県 居住地　大阪府 大学生時代　なし 家族構成　父母兄妹 男性（インタビュー対象者の交際相手） 年齢　22 歳 出身地　兵庫県 居住地　大阪府 大学生時代　文系 家族構成　父母兄妹
・3 人目　7 月 1 日インタビュー実施　1 時間 12 分間 現在交際 3 年半で、同棲歴 3 年程度。 女性（インタビュー対象者） 年齢　22 歳 出身地　大阪府 居住地　京都府 大学生時代　文系 家族構成　父母妹 男性（インタビュー対象者の交際相手） 年齢　22 歳 出身地　大阪府 居住地　滋賀県 大学生時代　文系 家族構成　父母弟
・4 人目　8 月 5 日インタビュー実施　48 分間 現在交際 1 年 3 か月で、同棲歴 3 か月程度。 女性（インタビュー対象者） 年齢　20 歳 出身地　大阪府 居住地　大阪府 大学生時代　なし 家族構成　母姉 男性（インタビュー対象者の交際相手）

年齢　23 歳 出身地　大阪府 居住地　大阪府 大学生時代　文系 家族構成　父母妹
・5 人目　8 月 5 日インタビュー実施　34 分間 現在交際 10 か月で、同棲歴 9 か月程度。妊娠したため 2 か月後に結婚予定。 女性（インタビュー対象者） 年齢　21 歳 出身地　大阪府 居住地　大阪府 大学生時代　なし 家族構成　父母姉弟 男性（インタビュー対象者の交際相手） 年齢　32 歳 出身地　大阪府 居住地　大阪府 大学生時代　なし 家族構成　母姉妹
・6 人目　8 月 10 日インタビュー実施　28 分間 前回交際していた男性と同棲を経験。現在は交際していない。 女性（インタビュー対象者） 年齢　22 歳 出身地　福井県 居住地　京都府 大学生時代　文系 家族構成　父母妹 男性（インタビュー対象者の元交際相手） 年齢　21 歳 出身地　岡山県 居住地　京都府 大学生時代　文系 家族構成　父母兄 2 人
・7 人目　8 月 27 日インタビュー実施　51 分間 現在交際 1 年半で、同棲歴 1 年程度。 女性（インタビュー対象者） 年齢　22 歳 出身地　群馬県 居住地　京都

大学生時代　文系 家族構成　父母弟 男性（インタビュー対象者の交際相手） 年齢　22 歳 出身地　茨城県 居住地　京都府 大学生時代　文系 家族構成　父母妹

上記 7 名にそれぞれインタビューを行った。

(3) 分析方法

上記 7 名に行ったインタビュー内容の結果について、コレスポンデンス分析を行った。コレスポンデンス分析とは、クロス集計表を元データとして、類似した項目同士を近くに配置するマッピングの手法である。元データとなるクロス集計表とは、以下の表のように質問項目を 1 つの表の表頭と表側に分け、それぞれのカテゴリー（選択肢）が交わるセルに、表頭と表側の両方に該当する回答数やその回答比率を記載した表のことを指す。

表：3　クロス集計表について

		表頭		
		A	B	C
表側	1	数値		
	2			
	3			

(4) 分析の流れ

はじめに、インタビューを行った約 5 時間分のデータを 63470 文字に、以下のような形で文字起こしをした。

表：4　文字おこしについて

どんな感じで付き合ったんですか？ 学園祭、イブ実の先輩（男）、後輩（女）やったんやけど、サークルみたいなもんやから。先輩後輩っていう感じで付き合ってんけどな。最初はみんなに内緒にしてた。付き合うっていうあんまりその団体の中になかったから。まぁばれとってんけど。うちが 3 回生で相手が 4 回生のときに付き合っててん。3 回生ってのが一番忙しい、最終学年のときやったから、まぁあんまりな（周りに）言われへんかった。10 月に付き合って、11 月が本番やったから。 ずっと 1 回生から知ってはる先輩ですよね？ うちが 2 回生から始めて、むこうが 3 回生やから。一番忙しいときでしんどいときやっ

たから、逆によかってんけどな。

次に、これら７人分のインタビューをすべてエクセルの表にまとめた。列には、カップル番号（CP1～CP7）、問番号（問 1～問 28）、出てきたキーワードなどの変数を入力し、行には段落番号（1～293）ごとにインタビュー内容を入力した。そして段落ごとにその文章の中で鍵となるキーワードを抽出し以下のようなエクセルの表を作成した。

表：5　インタビューをエクセルでまとめた一例

段落	カップル	問い	インタビュー内容	出てきたキーワード
1	1	問1　経緯	学園祭、イブ実の先輩（男）、後輩（女）やったんやけど、サークルみたいなもんやから。先輩後輩っていう感じで付き合ってんけどな。最初はみんなに内緒にしてた。付き合うっていうあんまりその団体の中になかったから。まぁばれとってんけど。うちが3回生で相手が4回生のときに付き合っててん。3回生ってのが一番忙しい、最終学年のときやったから、まぁあんまりな（周りに）言われへんかった。10月に付き合って、11月が本番やったから。[ずっと1回生から知ってはる先輩ですよね？]うちが2回生から始めて、むこうが3回生やから。一番忙しいときでしんどいときやったから、逆によかってんけどな。	学園祭・イブ祭・先輩後輩・サークル・最初・内緒・ばれてた・一番忙しい・3回生・4回生・しんどいとき

次にすべての文章から抽出されたキーワードから、頻出しているキーワードを選択し、似ているキーワードを１つにまとめることで、それらをカテゴリー化した。

表：6　カテゴリーとキーワードの一例

カテゴリー	キーワード	キーワード	キーワード	カテゴリー	キーワード	キーワード	キーワード
サークルやバイトの先輩後輩	先輩後輩	サークル	バイト	LINE や電話などの連絡	連絡	LINE	電話
カテゴリー	キーワード	キーワード	カテゴリー	キーワード	キーワード	キーワード	キーワード
お互い２人で	お互い	２人で	飽きはなくずっと一緒に居	一緒にいる	飽きはない	毎日会う	ずっと一緒

			る				

次に文章の段落ごとに、キーワードが 1 つ存在する場合「1」を、キーワードが 2 つ存在する場合「2」を、存在しない場合「0」をそれぞれ入力した。それらのカテゴリーを構成するキーワードの出現回数を（＝SUM）とし、カテゴリーの列にそれらの合計値を入力できるようにした。

表：7　インタビューの数値化一例

	出てきたキーワード	サークルやバイトの先輩後輩	先輩後輩	サークル	バイト
1	学園祭・イブ祭・先輩後輩・サークル・最初・内緒・ばれてた・一番忙しい・3回生・4回生・しんどいとき	2	1	1	0
2	1ヶ月一緒・はっきりしてほしい・今の彼女・継続・どっち・幸せになる方・交換・元カノ・連絡返してくれない・中途半端	0	0	0	0

このように、どの段落にどのようなカテゴリーが存在するか、どのようなカテゴリーが同じ段落内で同時に出現しているかを分析する。

次にこれらのデータから、コレスポンデンス分析を行った。コレスポンデンス分析を行うために、以下の表のように、列に段落番号（1～293）、カップル番号（CP1～CP7）、問番号（問 1～問 28）、カテゴリーを変数として入力し、行にはすべての値を「0」「1」「2」

に変換した数値を入力した。

表：8　コレスポンデンス分析用エクセル（1）

段落番号	CP1	CP2	CP3
1	1	0	0
2	1	0	0
3	1	0	0
4	0	1	0
5	0	0	1
6	0	0	1
7	0	0	1
8	0	0	1
9	0	0	0
10	0	0	0
11	0	0	0
12	0	0	0
13	1	0	0
14	0	1	0

表：9　コレスポンデンス分析用エクセル（2）

問1	問2	問3	問4
1	0	0	0
1	0	0	0
1	0	0	0
1	0	0	0
1	0	0	0
1	0	0	0
1	0	0	0
1	0	0	0
1	0	0	0
1	0	0	0
1	0	0	0

1	0	0	0
0	1	0	0
0	1	0	0

表：10　コレスポンデンス分析用エクセル（3）

サークルやバイトの先輩後輩	お互い2人で	告白した	告白された	仲の良い友達だった	彼氏と仲良しで不満が無い	前つきあっていた人の相談
2	0	0	0	0	0	0
0	0	1	0	0	0	1
0	1	0	0	1	0	0
1	0	0	2	0	0	0
0	0	0	0	2	0	2
0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	1	0	0	0
0	0	0	1	0	0	0
1	2	0	0	1	0	0
0	1	0	0	1	0	0
1	1	0	0	0	0	1
2	1	1	0	2	0	0
0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0

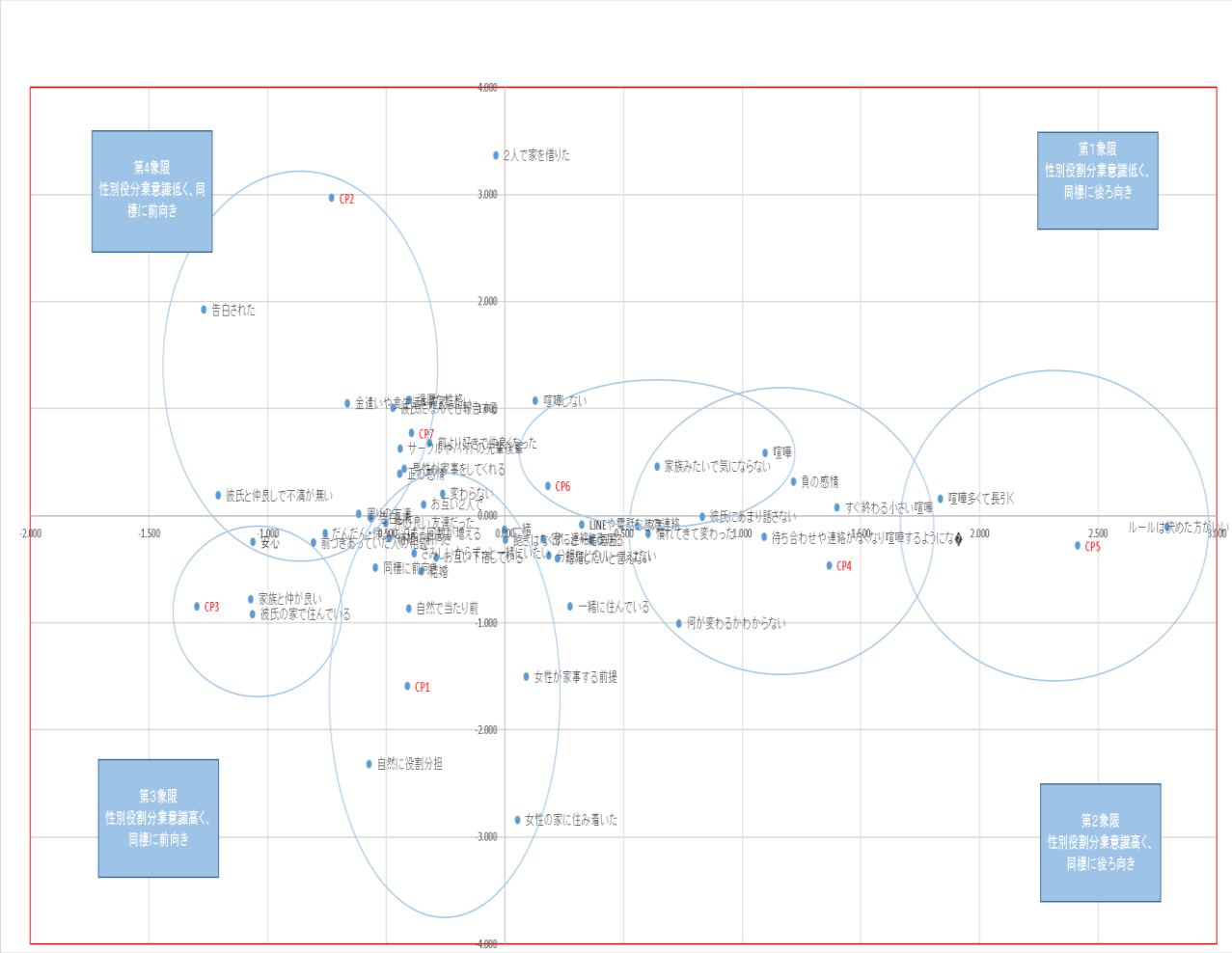
これらの表をもとに、コレスポンデンス分析を行うと、以下のような結果がでた。

表：11　コレスポンデンス分析結果一例

列	次元の得点	
	1	3
列	1	2
CP1	-0.411	-1.591
CP2	-0.730	2.968
CP3	-1.298	-0.844
CP4	1.366	-0.463
CP5	2.413	-0.279
CP6	0.180	0.280
CP7	-0.395	0.771

サークルやバイトの先輩後輩	-0.442	0.628
お互い２人で	-0.343	0.106
告白した	-0.565	-0.022
告白された	-1.269	1.924
仲の良い友達だった	-0.503	-0.070

この表は、数値にマイナス「 - 」がついている項目同士が似ていて、ついていない項目同士が似ているということを表している。つまり、CP1、CP2、CP3 が似た傾向を示していて、CP4、CP5、CP6、CP7 が似た傾向を示しているということである。また、CP3 や CP5 は数値が他のものと比較すると大きく出ているため、特異な傾向が見られるということを表す。この表を散布図に変換すると以下のような散布図が出来上がった。



図：12　コレスポンデンス分析結果の散布図

(5) 分析結果

図の左側には「前より好きで仲良くなった」、「お互い２人で」、「正の感情」など、同棲に対して前向きなカテゴリーが並んだ。一方、図の右側には「待ち合わせや連絡がなくなり喧嘩するようになった」、「慣れてきて変わった」、「負の感情」など、同棲に対して後ろ向きなカテゴリーが並んだ。これらをもとに考察すると、CP1、CP2、CP3、CP7 は図の左側にあるため同棲に前向きであり、CP4、CP5、CP6 は図の右側にあるため同棲に後ろ向きであると考える。また、図の上側には「男性が家事をしてくれる」という項目があり、下側には「女性が家事をする前提」という項目がある。そのため、図の上にいくほど性別役割分業に対する意識が低く、下にいくほど性別役割分業に対する意識が高いという結果になった。つまり、図の第一象限に存在する CP6 は、1【性別役割分業意識が低く同棲に対して後ろ向き】で、第二象限に存在する CP4、CP5 は 2【性別役割分業意識が高く同棲に対して後ろ向き】で、第三象限に存在する CP1、CP3 は 3【性別役割分業意識が高く同棲に対して前向き】で、第四象限に存在する CP2、CP7 は 4【性別役割分業意識が低く同棲に対して前向き】であるということである。実際のインタビュー内容も以下のようにな

っている。

【1 性別役割分業意識が低く、同棲に対して後ろ向き】な CP6 のインタビューより

喧嘩めっちゃしました。もう同棲やめようみたいな喧嘩をいっぱいしました。理由は結構、うちが雑なんで。部屋に片づけないし、家事とかも任せてしまって。そういうのに怒ってましたね。［それは、最初帰ってる時期よりも同棲してからの方が増えました？］増えましたね。ずっと一緒にいると。

【2 性別役割意識が高く、同棲に対して後ろ向き】な CP4 のインタビューより

後悔っていうか、もうちょっと考えたらよかったなって思うことが多いです。正直。[例えばどんな？]簡単なことから言うと、半同棲の時はやっぱり一人分の洗濯を全部するわけじゃないから、たまってるやつとかだけやったからよかったんですけど、2 人分の洗濯毎日、2 人分の食事毎日、みたいな。自分がはやく帰ってご飯作らないと待ってる、みたいな。自分だけで生活してたけど、それが相手に委ねるっていうか、相手にかける時間が多くなってしんどいです。今の自分の容量じゃついていけてない。嫌ではないです。ただ、できない。本当に全くできないんです。

【3 性別役割意識が高く、同棲に対して前向き】な CP3 のインタビューより

想像通りっていうところも多少あるかもしれん。そのなんていうかミステリアスな人ではないから基本的にはまんま。向こうも元々性格を良く分かってくれてたし、まあ私は結婚して、その家事とか好きな方やからそこではあまり苦労させてはないかなと思ってる。どう思ってはるかそれは知らんねんけど。結婚というワードをあんまり出して話はせえへんな。むっちゃ変わったとかはないし、悪い感じもないし、っていう感じやな。

一緒にいて楽しくて帰りたくないから同じ家に帰れるっていうことが一番かな。同棲も結局それで始めたから、二人の関係として二人でいてなんか帰りたくないね楽しいねっていうのがまあこのまま続いたらたぶん同じ家に帰るっていうのが、今家計も同じ状態やし、ほぼ変わらんのかな。

【4 性別役割分業意識が低く、同棲に対して前向き】な CP2 のインタビューより

最初も今も変わらないですけど、嫌と思ったことないし。同棲したら嫌と思う人多いじゃないですか。でも嫌と思ったことないです。［例えばなんでこんなに散らかるの？とかイラッとしない？］うーん。そうなったらイラッとするけど、そういうのがないから。常に綺麗やし、なんでもしてくれるんですよほんまに。洗濯

も掃除も全部やってくれる。中身がめっちゃ良い人なんで。

また、CP1～CP7 に対して影響が大きいカテゴリーを分類すると、以下のようになった。

表：13　コレスポンデンス分析結果カテゴリーまとめ

CP1	自然に役割分担	自然で当たり前	同棲に前向き	女性の家に住み着いた	
CP2	彼氏と仲良しで不満が無い	男性が家事してくれる	彼氏になんでも報告する		
CP3	家族と仲が良い	安心	同棲に前向き	結婚	
CP4	彼氏にあまり話さない	慣れてきて変わった	待ち合わせや連絡が無くなり喧嘩するようになった	女性が家事する前提	負の感情
CP5	ルールは決めたほうが良い	喧嘩多くて長引く			
CP6	家族みたいで気にならない	喧嘩			
CP7	前より好きで仲良くなった	正の感情	変わらない	お互い2人で	

上記の表より、同棲に対して前向きな CP1、CP2、CP3、CP7 には、「彼氏に何でも報告する」「お互い 2 人で」などのカテゴリーがあることから、コミュニケーションを密にとっていることが推測できる。一方同性に対して後ろ向きな CP4、CP5、CP6 には、「彼氏にあまり話さない」「家族みたいで気にならない」などのカテゴリーがあることから、一緒に住んでいるにも関わらず、コミュニケーション頻度が低下していることが推測される。

4　理論枠組み

この調査結果を分析するために、タルコット・パーソンズの AGIL 理論と道具的指向・表出的指向を使って考察していく。この章では、パーソンズの理論枠組みについて述べる。

4.1　AGIL 理論

パーソンズによると、社会システムがその活動を維持していくためには、1．システムとシステムの外部環境との関係を調整する。2．システム内部の成員間の関係を調整する。という２つの機能的要件が必要であるという。

これらのうち 1．外部環境との調整には、

A「環境への適応」：環境に適応し、環境から目標を達成するために活動に必要な資源（人員や資金）を調達する

G「目標達成」：システムが外部に働きかけてシステムの目標を達成する

という２つの機能的要件がふくまれる。
また、2. システム内部の調整には、
I「統合」: 役割分担を明確にするなど、成員の秩序だった活動を実現する
L「潜在的パターン維持」: 成員相互の融合をはかったり、成員間に生じるさまざまな緊張を解消したりする
という機能的要件がある。これらの要素を表にまとめたものが以下の表である。

表 14：AGIL について

	道具的	**手段的**
外的	A：適応機能	G：目標達成機能
内的	L：パターン維持と緊張処理の機能	I：統合機能

本来社会システムは A→G→I→L の順に行われるのだが、今回は同棲するカップルの内部事情に焦点を当てているため、図の下位部分を利用する。つまり、役割分担を明確にするなど、成員の秩序だった活動を実現できた場合にのみ、成員相互の融合をはかったり、成員間に生じる様々な緊張を解消できたりするという流れである。ではカップル間の役割分担について考察するために、道具的行為・表出的行為について述べる。

4.2　道具的指向・表出的指向

道具的指向と表出的指向について理解する前に、人間が行う「行為」について理解する。パーソンズ（1975）によると、行為者の動機によって、行為の指向性を、認知的、カセクシス的、評価的に区分し、そのうち評価的行為指向を、道具的、表出的、道徳的に区分した。

表 15：行為の指向性

動機指向	認知的	行為に対する知識・情報にもとづく動機づけ
	カセクシス的	「好き」「嫌い」というような、行為に対する感情にもとづく動機づけ

	評価的	認知的動機づけとカセクシス的動機づけの両者の総合 （道具的指向・表出的指向）

つまり、評価的指向性の中に分類される「道具的指向」と「表出的指向」は行為に対する知識や情報と、その行為自体に対する行為者の感情のどちらもが、行為をする上で重要視されることが分かる。パーソンズ（1975）によると、道具的指向では、一定の目標が与えられると、それを実現するための認知的配慮を中軸として行為選択が行われる。これに対して、表出的指向では、欲求充足の編成をめぐる評価的選択が行われるという。部活動という分かりやすい具体例を提示して説明する。毎日の練習・筋肉トレーニングを消化することだけが目的なら道具的指向であるが、練習によって汗を流すことや仲間と練習できることがすなわち快感に繋がっているのであれば、表出的指向であると言える。つまり言い換えると、道具的指向における行為とは、目標の達成自体を目的とする行為を指す。これは行為者の感情を抑制し、「しなければならない」、「することが当然視されている」という面を持つ。一方表出的指向における行為とは、即自的な欲求充足を目的とする行為を指す。これは行為をすることによって得られる満足感であり、「したい」という面をもつ。ある行為が道具的か、表出的かは、その行為者や環境に依存するため、どんな行為をすると道具的、というように行為によって規定されるわけではない。また、先ほどの部活動の例で述べると、「練習はしなければならないが、仲間と練習できることは満足」というように道具的指向・表出的指向の両方を兼ね備えることもある。

また、パーソンズ（1975）によると、道具的行為のモチベーションが便益であるに対して、表出的行為のモチベーションは報酬であるという。便益とは、即自的な欲求充足ではなく、何らかの未来の目標に対する手段として用いられるように、予定されている所有物のことを指す。このような欲求充足は、相手の属性に依存するばかりでなく、行為者に対する相手の特殊な関係にも依存している。つまり、「今はしんどくても、してあげたから何か返ってくるかな」というものが便益、「してあげること自体がうれしい」というものが報酬であり、特別な意味をもつ相手でなければ欲求充足にならず、行為自体にも繋がらないということである。

また、パーソンズ（1975）によると、特別な意味をもつ相手にのみ行為のモチベーションが保たれる、ということは、場合によっては、相手に対する忠誠を撤回できることを意味するという。つまり、相手の忠誠を期待できるのは、何らかの条件が満たされる場合に限られ、してあげることが嬉しいという報酬、もしくは、将来的な自身の利益となる便益、もしくはその両方がないと、他者に対する忠誠を撤回できるのである。このような条件が構造化されなければ、社会体系は安定しない。これはカップルという小さな社会体系にも応用できると考えられる。これらの理論枠組みを使って実際に調査結果を考察してみる。

５．考察

ここでは、第 4 章で述べた道具的・表出的役割の分担によって、カップルは AGIL の I（統

合）の部分で停滞しているのか、 L（潜在的パターン維持）の部分まで行われているかを考察し、その 2 人の関係性について、第 2 章で述べたギデンズの純粋な関係性論をもとに考察する。また、第 3 章の分析結果から、「性別役割分業意識」と「コミュニケーション頻度」について焦点を当てて考察を行う。対象は、性別役割意識はどちらも高いが、同棲に対して後ろ向きな CP4 と同棲に対して前向きな CP1 を比較する。

5.1　事例（その１）

【2 性別役割分業意識が高く、同棲に対して後ろ向き】な CP4 のインタビューより

> 簡単なことから言うと、半同棲の時はやっぱり一人分の洗濯を全部するわけじゃないから、たまってるやつとかだけやったからよかったんですけど、2 人分の洗濯毎日、2 人分の食事毎日、みたいな。自分がはやく帰ってご飯作らないと待ってる、みたいな。自分だけで生活してたけど、それが相手に委ねるっていうか、相手にかける時間が多くなってしんどいです。今の自分の容量じゃついていけてない。嫌ではないです。ただ、できない。本当に全くできないんです、あっちが洗濯器のまわし方も分からなかったり、炊飯器のボタンどれ押したらいいかわからんって言われたり。多分教えたら出来るんですけど、やろうとしない人やから、もう言うだけ疲れてきて。自分でやった方がはやいし。［最初はやっぱりやってほしいなと思って言ったりしてた？］めっちゃ。でもイライラするんですよね。言うてるときに。だから言わないでおくんですね。だから同棲めっちゃしんどいって。

この事例では、家事という行為に焦点を当てて考察する。「自分がはやく帰ってご飯作らないと待ってる」や「多分教えたら出来るんですけど、やろうとしない人」などの発言から、家事は女性の役割になっていることが分かる。また、女性は家事に対して「相手にかける時間が多くなってしんどい」や「2 人分の洗濯毎日、2 人分の食事毎日」などの表現から、女性は相手のために家事をすることに対して、相手の分までしなければならないものであると認識しており、家事が道具的役割になっていることが推測される。また、道具的役割に対する相手からの便益を見いだせていないため、行為のモチベーションが保たれていないことが上記インタビューからわかる。

5.2　事例（その 2）

【2 性別役割分業意識が高く、同棲に対して後ろ向き】な CP4 のインタビューより

> ［連絡とかってどれぐらいとってます？］今ですか？ぜんぜん。帰るわーみたいなのだけ。帰る LINE もないときもある。一日しないときとか。今まで LINE の履歴の一番上とかにあったのに、今は下の方にある。［完全に同棲する前は連絡ずっと連絡とってたんですか？］そうですね。待ち合わせとかもあったし、今何してるとか。今は必要ないから、なくなったな。寂しさもあります。［同棲前は暇なときとかも連絡取ってました？］とってました。暇なとき LINE して。いいなー。

同棲やめようかな。ドキドキがあんまりない。そういうところからですかね。好きっていう感情が少なくなっちゃうの。

この事例ではコミュニケーションという行為に焦点を当てて考察する。「帰る LINE」や「今何してるとか。今は必要ないから、なくなった」という表現から、LINE というツールによるコミュニケーションを道具的役割だと認識している面もあるが、「寂しさもあります」や「暇なとき LINE して。いいなー」などの表現から、この女性にとっては表出的役割も兼ね備えていることが分かる。この場合、実際にコミュニケーションがとれていないため、便益も報酬も得ていない。そのため行為のモチベーションを保つことが出来ず、相手にたいする忠誠を撤回しかけており、「同棲やめようかな」という発言に繋がっていると考えられる。

また、事例 1・2 はどちらも同じ女性のインタビューから抜粋したものであるが

嫌なところは、何も言わずにやってくれればいいのにって思うけど、やろうとしてくれないところが嫌やなって。喧嘩してひたすらそのことで喧嘩するんですけど、また喧嘩また喧嘩って感じなんです。

という発言からも分かるように、家事においてもコミュニケーションにおいても、カップル間の秩序だった活動を実現できているとは言い難いため、AGIL における成員相互の融合をはかったり、成員間に生じるさまざまな緊張を解消したりする 「潜在的パターン維持」という段階には進んでいないことが分かる。

5.3　事例（その 3）

【3 性別役割分業意識が高く、同棲に対して前向き】な CP1 のインタビューより

［家事分担はどうしてるんですか？］分担してないな。うちが全部やってたんちゃうかな。うちがバイト行って帰ってきたらご飯は作ってくれてたよ。［でも掃除、洗濯、食器洗いとか ］でも一緒にやってたんちゃうかな？あんまり私ばっかりって思ったことなかったな。（相手は）自分ができひんことをやってくれるねんか、タイプ的に。蛍光灯替えて、とか。勝手に分担ができてるかな。

この事例では、家事という行為について事例 1 とは異なるパターンのカップルから考察する。「うちが全部やってたんちゃうかな」や「（相手は）自分ができひんことをやってくれる」という発言から、家事が道具的役割であるとお互いが認識していることが分かる。ここで考えられる便益とは、「今ご飯を作るし、今度蛍光灯替えてもらおう」といったように、将来的に自分に利益があることが前提であり、それ自体が明確に想像できるため、家事という行為に対してモチベーションが保てていると考えられる。これについて女性は「私ばっかりって思ったことなかった」や「勝手に分担ができてる」と表現している。

5.4　事例（その 4）

【3 性別役割分業意識が高く、同棲に対して前向き】な CP1 のインタビューより

> （連絡は）毎日してたよ。7 年間。半同棲してたときも。多いんかな？未だに LINE とか。ツールは変わったけどやってるな。逆に 1 週間あいたとかないな。7 年間。多分ないと思う。ほんまに、帰るよーとか。会わへんときは電話してたかな。［それって嫌な人もいるじゃないですか？ ］お互いにそれが嫌じゃなかったんやと思う。お互いマメやと思う。付き合うときも、マメな人と付き合いたかってん。自分がマメやからってのもあるし、それが嫌な人は多分無理やなって思ってた。［今までもずっとマメな人と？］お互い、マメじゃない人と付き合っててん。お互い放置気味の人と付き合ってて、それが嫌で別れたから、次はマメな人がいいっていうのが多分あったんやと思う。

この事例では、事例 3 と同様の女性でコミュニケーション頻度について考察したものである。「毎日してた」や「帰るよーとか」という発言から、携帯電話という媒体によるコミュニケーションを道具的役割だと捉えている一方で、「お互い放置気味の人と付き合ってて、それが嫌で別れたから、次はマメな人がいいっていうのが多分あった」という発言から、お互いに表出的役割も見出していることが分かる。ここで考えられる便益は、「連絡送ったから返事が来るだろう」であり、報酬は「連絡をしたい気持ちが満たされた」というものである。これはどちらか一方ではなく、お互いがそのような便益・報酬を求めているため、行為のモチベーションに繋がっていると考えられる。

また事例 3・4 においても、どちらも同じ女性のインタビューから抜粋したものであるが

> お互いイラッとせんかったんやろな。せんようにしてたんかもしれん。お互いあんまり嫌なとこを見つけようと思うタイプではなかったかな。解決策を探すタイプかな。

という発言からも分かるように、家事に対してもコミュニケーションに対しても行為のモチベーションを保てており、成員の秩序だった活動を実現しているため、AGIL における、「統合」の段階を経て、成員相互の融合をはかったり、成員間に生じるさまざまな緊張を解消したりする 「潜在的パターン維持」に達しているカップルであると言える。

5.5　純粋な関係性との関連について

5.1 から 5.4 までは、実際のインタビュー内容をもとに、道具的役割と表出的役割がカップルにどのような影響を与えうるか考察した。ここでは、先ほどの CP1 と CP4 について道具的役割と表出的役割が、純粋な関係性にどのような影響を与えるのかを考察する。

純粋な関係性において、2 人の歴史をつくるためには、お互いが相手のために尽くしていく必要がある一方で、男女は相手の思うままに関係を終わらせることができるという側面が存在する。事例 1・2 の CP4 は、「だから同棲めっちゃしんどい」「好きっていう感情が少なくなっちゃうの」という表現から、家事とコミュニケーションに対する相手からの便

益や、自らの報酬を得ていないことが、すなわち純粋な関係性の悪化に繋がっていることが分かる。一方、事例 3・4 の CP1 は「私ばっかりって思ったことなかったな」という表現や、インタビューにおいても、「むこうに心配かけるとか、俺ばっかりとか言われたこともなかった。安心させたいな。不安にさせて良いことがあると思わへん。だからお互いちゃんと想ってることがわかってたんやろね」と述べていることから、便益や報酬をお互いに得ている場合、純粋な関係性はうまくいくことが分かる。

また、密に連絡を取りたいという欲求は、純粋な関係性の特徴である、関係の解消が個人の感情に左右されるといった不確定要素があるため、付き合っていても漠然とした不安がぬぐいきれず、常に関係のメンテナンスを行うような振る舞いにつながることが多いという内容とも一致する。このようにカップルの関係性は、さまざまな尺度において関係性の親密度を測ることができるのではないだろうか。

6　結論

6.1　まとめ

以上のように、筆者の考察から見えてきたことは、お互いの家事やコミュニケーションの仕方に対して両者が納得することが、同棲するカップルの結婚意欲を低下させないために重要だということである。第 3 章の分析結果をもう一度振り返ってみると、同棲に前向きなカップルからは「彼氏に何でも報告する」、「(同棲を始める前と) 変わらない」というカテゴリーが並び、同棲に後ろ向きなカップルは「彼氏にあまり話さない」、「慣れてきて変わった」などのカテゴリーが並んだ。このことから、相手がどのような行為に対して道具的だと捉えるのか、表出的だと捉えるのかをしっかりと話し合い、相手を理解することが大切なのである。また、「慣れてきて変わった」というカテゴリーからも分かるように、同棲を始める前の行為に対する捉え方と、同棲した後のそれが異なっている場合も同棲に対して後ろ向きになってしまう原因の一つであると考えられる。女性が家事を表出的に捉え、「家事をしていることが幸せ」であるならば家事は女性の役割として任せると良いし、女性が家事を道具的に捉えているのならば、家事をしてくれたお礼に何かプレゼントをするか、もしくは家事を 2 人で分担すると良いだろう。また、コミュニケーションに関しても、お互いが連絡を道具的と捉えているのならば必要最低限で構わないし、一方が道具的で、もう片方が表出的に捉えているならばそのズレを無視せず話し合うことが重要なのである。

6.2　今後の課題

本稿は、同棲を経験した人は結婚意欲が低下するというデータについて、近年増加傾向にある大学生の同棲カップルを対象に調査したものであった。しかし筆者がインタビューできたのは 20 歳前半から 20 歳後半の女性 7 人のみであるため、より多くの女性にインタビュー出来ていた場合、結果や考察が異なっていた可能性は否定できない。また、女性側からの視点のみを取り上げたため、男性が同棲に対してどのような感情を持っているのか分からず、公平な意見とは言えない部分もある。今後、多くの同棲するカップルと深い親交が出来た場合、詳しい話を聞いて自分なりに信頼できる結果を得たいと思う。

謝辞

本稿執筆にあたり、様々なご指導頂きました立木茂雄先生に深く感謝しています。また、インタビューのためにお時間を取ってくださり、快く協力して下さった皆様、本稿執筆に関わってくださった皆様、心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。

参考文献

アンソニー・ギデンズ, 1995,『親密性の変容―近代社会におけるセクシュアリティ、愛情、エロテイシズム―』而立書房.

佐藤博樹，2010,『結婚の壁　非婚・晩婚の構造』頸草書房，77 - 94.

田野崎昭夫，1975,『パーソンズの社会理論』誠信書房，47 - 55

野々山久也，1985,『離婚の社会学』金羊社，261 - 287.

山田陽子，2009,「恋愛の社会学序説―‘コンフルエント・ラブ’が導く関係の不確定性―」『現代社会学部 10』133 - 144.